門前街

祭りばやしの裏側に
強い陽射しが眩しくて
迷いのうちに笛の音は
遥か彼方へ遠のいて

僕は笑っていた
切なさに胸しめつけられて思わず
僕は愛していた
少し照れくさげに踊る若衆達を

生活（くらし）・・・生活（くらし）・・・

果てしないその広がりの上を
ひとつ、またひとつ

時間（とき）の記憶が過ぎてゆく

何も追わず、ひとり取り残され
祭りばやしは僕の上を素通りし
僕が歩くのは隙間ばかり
愛しているのは香りばかり

今この時をガラス越しに眺め
優しげに手招きする人々を羨みつつ
なお戸を開かずにここに滞り
耳を澄まし、ひとり佇む

「満ち足りるということは・・・」

そこはかとない不安の波が
満たされぬ想いを濡らし
半纏姿の人々は通り過ぎて
祭りの余韻が細くたなびき

薄い余韻の裏側に
強い陽射しが眩しくて
迷いのうちに生活の手招きは

印象の彼方に遠のいてゆく
朝が去るにつれて・・・

(1985.7.9)